

IV-206 緑に関する住民意識と行動の分析

東京都立大学 学生員 小島 淳
東京都立大学 正員 山川 仁

1. はじめに

1-1 研究の目的

都市の少ない緑をより有効に活用するために、住民の要望を取り入れた緑空間の整備が必要になり、緑意識を把握することが急がれた。これまでに緑意識に着目した研究は数多く行なわれてきたが、¹⁾ 緑に接する行動についての研究は少ない。

本研究では、都市の住民が日常生活の中で緑をどのように意識し、実際にどのような場所へ緑を求めて行動しているのかを知り、住民の求める緑空間を把握することを目的とする。

1-2 研究の方法

意識調査では住民の緑に関する意識と緑に関する行動に分け、地図等からの計測結果を交えて住民の緑に関する行動を把握する。

(1) 緑の分類と定義

本論では緑を図-1のように分類した。緑を私的緑（庭・生け垣など宅地内の緑）と公的緑（公園・緑道・神社や寺の境内などの緑・街路樹）に分けた。公的な緑空間で緑に接したり、ふれ合ったりして緑と親しむことを『緑行動』と定義した。

(2) 意識調査

意識調査は表-1の通りに行なった。

2. 住民の緑に関する意識の分析

2-1 住民の意識する緑

住民の意識する緑は全体的に公的な緑を意識する人が多い。地区別に見ると、図-2に示すように公的な緑を意識する人が集合住宅地区では94.6%にも達する。一戸建てに住む人について庭の有無別に意識する緑をみると、庭を所有している人は所有していない人よりも私的な緑を意識する率が高い。

2-2 緑の多少感と満足感

居住している地区的「緑が多い」と答えた人の全回答者に対する比率を多少感、「緑に満足」と答えた人の全回答者に対する比率を満足感として地区別

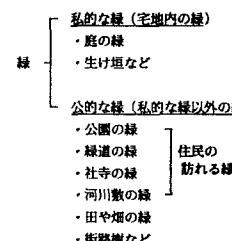


図-1 緑の分類と定義

表-1 意識調査

期間	1988年12月～1989年1月
調査対象	1280
調査方法	アンケート面問調査
有効サンプル数	331 (25.9%)
回収率	26.7%

表-2 調査地区概要

地区名	対象地区	特徴		
		土地利用	住宅形式	緑
戸建	中町5丁目 深沢7丁目	住商混合地区 戸建住宅地区	戸建	多い
集合	中町5丁目	集合住宅地区	集合	多い
商業	押上2丁目	住商混合地区	混 合	少くない

戸建	(38.8%)	(61.2%)
集合	(9.4%)	(90.6%)
商業	(5.4%)	(94.6%)

図-2 地区別・意識する緑（公的か私的か）

表-3 緑の多少感・満足感と緑被率

地区	緑被率(%)	多少感(%)	満足感(%)
戸建	15.6	65.0	52.0
集合	44.0	79.3	65.8
商業	3.2	11.3	9.3

に緑被率との関連を見ると表-3に示すとおり多少感と緑被率の間には強い関連性が見られた。また、緑の多少感と満足感は表-4に示すようにかなりの相関がある。しかし

表-4 緑の多少感と満足感

	満足	不満	どちらとも	合計
多い	128	33	18	179
少くない	2	88	7	97
どちらとも	14	25	11	50
合計	144	146	36	326

緑の満足感を外的基準にして数量化II類で分析した結果を表-5に示す。もっとも強い要因は緑の多少感であり、庭の広さも関連が強く、緑行動を多くする人ほど満足する傾向にあった。

表-5 数量化II類による緑の満足感の分析

		相関比 0.521 調査対象 12.0%			
実数	カテゴリ	カウント	重み	レンジ	P C
年 令	30才未満	24	0.423		
	30~39	42	-0.231		
	40~49	40	0.093	0.663	0.199
	50~59	42	0.044		
	60~69	42	-0.184		
	70才以上	27	0.061		
職 業	会社員	65	0.182		
	自由業	22	-0.040		
	主婦	68	0.023	0.463	0.172
	学生	11	0.161		
	その他	51	-0.281		
庭の広さ	なし	100	0.002		
	30m未満	32	0.240	0.609	0.208
	30~100m	41	0.213		
意識する 緑	公的	164	0.066	0.272	0.116
	私的	53	-0.206		
緑の 多少感	多い	90	-0.966		
	ない	90	0.075	1.841	0.643
	どちらとも	37	0.221		
緑行動	ほぼ毎日	35	0.260		
	週1~2回	42	-0.101	0.442	0.144
	月1~2回	74	0.069		
	年1~2回	42	0.146		
	やらない	24	0.181		

3. 住民の緑行動の分析

3-1. 緑行動の頻度

緑行動の頻度は月1~2回、年1~2回が多く緑行動は全体的に少ないと思われる。(図-3) そこで、月1~2回、年1~2回と答えた人にその理由を尋ねたところ、「緑行動をしたいけれども暇がない(67.8%)」「十分である(22.0%)」「場所がない(10.2%)」であった。

3-2. 緑行動の場所

緑に接することのできる場所について住民の行動を尋ねた。その結果図-4に示すようにどの地区でも公園の割合が一番高い。

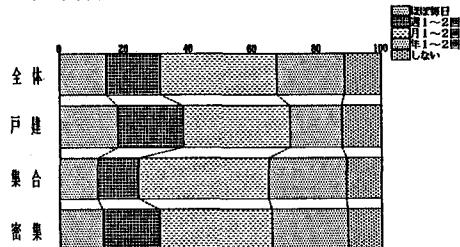


図-3 地区別・緑行動の頻度

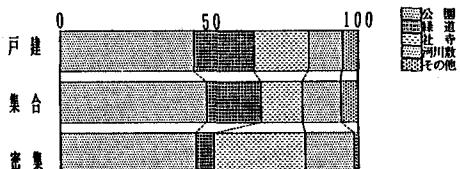


図-4 地区別・住民が訪れる緑空間

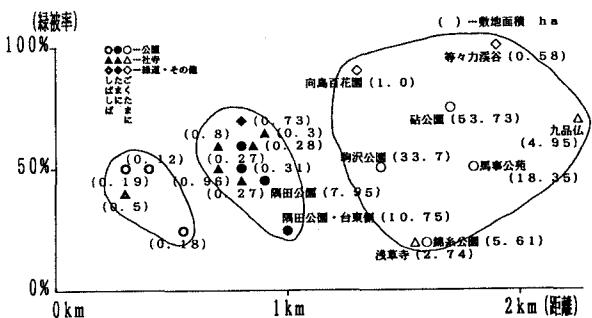


図-5 住民の訪れる緑空間

3-3. 住民の訪れる緑空間

緑空間の緑被率を縦軸に、調査地区から緑空間までの距離を横軸にとり、頻度別に緑空間をプロットしたものを図-5に示す。『しばしば』訪れる人が多かった緑空間は敷地面積は小さいが距離が近く、身近に存在している公園や社寺となっている。頻度が『たまに』『ごくたまに』と少なくなるにつれて距離が遠い緑空間になっている。しかし、これらの緑空間はそれぞれ敷地面積が広い、緑が多いなど人を引きつける魅力を持っている。

4. まとめ

- ① 住民は庭などの身近に存在する緑や自分が住んでいる地域の公園・社寺などの緑空間の多少によって緑の多さの判断し、また、緑に対する満足感もこれに左右されることが明らかになった。とくに庭などの身近に存在する緑は、人々の緑の認識に大きな影響を与えている。
- ② 住民が実際に接している緑空間は、狭くても身近に存在する緑空間であり、距離が遠い場合は敷地が広い、緑が多い、など魅力のある緑空間（個性のある緑空間）である。
- ③ 今後の緑空間のあり方として、多くの人々に親しまれるように、個性のあるものにする必要がある。そして、既存の緑空間を住民の望むように整備し直すことが大切になってくると思われる。

参考文献

- 1)井手任ほか「『みどり空間』の親しみやすさに関する基礎的考察」 日本都市計画学会学術研究論文集第20号 1985